



気になるあいつ  
わかぎゑふ

双葉社

## 大人への扉

写真のおっさん…いや、青年は私が客演している劇団の作家である。森澤匡晴という字数の多い名前な奴だ。33歳というのだが、少々老けている。「おっさんにしか見えん！」といじめたら「あんたが若く見えるから悪い」と反論された。

森澤君は今、劇団の方向性や、作家としてどう書いていくべきかなどのターニングポイントに立っているようで、笑いながらも悩んでいるようだ。なんだか、昔の自分を見ているようで可愛い奴でもある。

奴はこの間、今度の芝居に使う小道具「小学生の給食着袋20個」を作

りに、うちの事務所にやってきた。というのも、うちには劇団のミシンやアイロンが常備されているので、縫い物をする環境が整っているからだ。もちろん、縫ったのは私で、彼はアイロン係だった。

縫い物をしながら、「ああ、ビール飲みたい」と叫ぶ私の横で、彼は自分のことや、劇団の将来についてポツポツと語り始めた。コメディを主体として書いている自分の中に、笑いの種が無くなってきたような恐怖感…それをどう乗り越えていくべきか？ などをである。私に言わせると「そんなもん頭で考えてもしょうがない。書いていくしかない」話なのだが、彼はそれを悶々と考えてしまう時期のようだ。

あつたなあ、こんなこと言うとした時期…と私は弟が受験に悩んでるかのような感覚で笑って見ていた。すると突然奴は「ああ！ 突然天使にキスされて笑いを取り戻したい！」と言い放った。さすがは作家というか、脚本を書いているだけあって面白い表現だった。要するに、なんでもいいから解き放たれたいという欲求がのっけているらしい。

問題はそんな素敵なことを言った彼がおっさん臭いことである。中途半端な感じのおっさん顔、鍛えてなさそうな肉体：誉めようのないポロシャツ：なんだかヨーロッパ映画に出てくる1シーンのような感じだった。結局その日はうちの女優、ヨーコも加わって3人で夜中の3時くらいまで縫い物をし、最後はビールを飲んで宴会をして終わった。「この人、天使にキスされて笑いたいねんて」と私が冗談で言うと、ヨーコが悪魔のような微笑を浮かべて、両手で手招きしつつ「いらっしやーい、天使よ！」と言ひ襲いかけた。

すると「そ、そんなじゃないんです！」と森澤君は本気で逃げた。どうやら本当に深く、深く悩んでいらっしやるようである。簡単にキスされてたまるかという風情だったので、私は大笑いしてしまった。人の悩みで笑うのもどうかとは思ふが：奴が大人になれることを天使に祈つてあげたい気分だ。

---

【著者略歴】

わかぎさるふ

1959年、大阪府生まれ。女優、エッセイスト。1986年より故中島らも氏とともに劇団「リリパット・アーミー」を主宰し、現在同劇団の進化形「リリパット・アーミーⅡ」の座長。1994年より演劇ユニット「ラックシステム」を旗揚げ。演劇制作会社「玉造小劇団」を運営し、女優のみならず、脚本、演出、メイクから衣装まで芝居全般にわたりその才能を発揮し続けるスーパーレディ。主な著書に『すみっこのすみっこ』『女体の神秘』『秘密の花園』『ぬくい女』『イブの抜け穴』『大阪弁の詰め合わせ』など多数。

---